資料４

第１分科会での検討過程で挙げられた第２分科会の検討に関連する事項

【本資料について】

本資料は、第１分科会や地区部会に加え、各会議における意見等記入票で挙げられた意見のうち、第２分科会における検討の参考に資すると考えられるものについてまとめたものです。

なお、本資料に記載された意見がそのまま第２分科会における検討の前提となるものではなく、検討会議及び第２分科会において、本資料を参考にしながら、調査検討の視点や方法等について、改めて整理しながら進めることを想定しています。

令和６年２月２８日

青森県立高等学校魅力づくり検討会議　第１分科会

第２分科会における検討に関連する事項

第１分科会では、調査検討事項である「これからの時代に求められる力を育む学校・学科の充実」に係る調査検討に当たり、人口減少や社会のグローバル化、情報化、経済を取り巻く環境や生活環境の変化、価値観の変化・多様化の進行に伴う本県の教育を取り巻く環境の更なる変化を見据えながら、

○　急激に変化する社会における本県ならではの高等学校教育と、子どもたちの夢や志の実現を県全体が一体となって支えるための環境づくり

○　これからの時代に求められる力の育成と、それらの力を身に付けた人財の育成等を踏まえ、「高等学校に求められること」として次の観点を整理した。

○　生まれた場所や家庭環境にかかわらず、全ての子どもたちに一定の水準を満たした教育を提供することでウェルビーイングの実現を目指すとともに、誰一人取り残さないきめ細かな教育を提供する必要がある。

○　全ての子どもたちが安心して学べる環境づくりが必要である。

○　各校の特色を生かすとともに、高校間や学科間の連携のほか、小・中学校、特別支援学校、大学、地域、関係機関等の多様な主体等と連携・協働し、授業や特別活動、部活動、地域活動等の教育活動全体で更なる魅力化を図る必要がある。

○　「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた授業改善等のカリキュラム・マネジメントの適切な実施により、教育活動の充実を図る必要がある。

○　探究的な学びや学科横断的な学び、ＳＴＥＡＭ教育などの充実が必要である。

○　生徒のニーズを踏まえるとともに、大学への接続も考慮しながら、魅力ある学校・学科とする必要がある。

○　様々な教育制度等の下、学校・学科の魅力づくりに向けた環境整備が必要である。

○　所属する学科や進路志望によらず、全ての生徒に将来の生き方・在り方を考えさせ、「何を学びたいのか」「何を身に付けたいのか」といった目標を持たせるようなキャリア教育の充実が必要である。

これらについては、第２分科会における調査検討事項「生徒一人一人に充実した教育環境を提供するための学校配置」にも大きく関わるものと考えられることから、第１分科会における調査検討過程で挙げられた以下の点と併せて配慮いただきたい。

＜学校配置の方向性の検討に当たっての視点＞

○　子どもたちが自分の力ではどうすることもできないような家庭の経済状況などによって、学びたいのに学べないということがないよう、子どもたちの学びたいという思いに応えられる環境づくりが必要である。

○　人口減少が加速度的に進む中、今後の本県の推定人口を踏まえると、更なる高校教育改革の必要性を強く感じるが、単純に高校を閉校してしまうことで、子育て世代、若い世代が各地域から流出し、地域が衰退する。

○　限られた財政の中でより良い学びを実現するには、ある程度以上の規模の学校へと集約する必要がある一方、県の人口減少や産業構造等も踏まえる必要がある。

＜学校規模＞
○　生徒は人と関わる活動の中で成長していくものであり、学校行事、部活動等の教育活動による教育的効果を上げるためには、ある程度の生徒数、教員数が不可欠である。また、教育活動では生徒同士のトラブルが生じることもあるが、それを乗り越えるよう支援することも大事な教育である。しかし、１学年１学級ではクラス替えもできず、結果的に転校、退学につながる場合がある。地域の実情もあるため一律にはいかないと思うが、学校規模の維持を基本に据えてはどうか。 ○　ある程度の学校規模の維持（１学年が２学級以上、できれば６学級以上）を基本とすることが望ましい。
＜学級編制＞
○　中学校は学年進行で３５人学級編制となるため、高校においても少人数学級編制について検討しても良いのではないか。そのことで、教員の負担が軽減され、生徒と向き合う時間の確保につながるとともに、多様な生徒への対応の充実が図られ、県立高校の魅力化につながる。
＜定時制・通信制課程の配置＞
○　定時制・通信制過程は多様な生徒を受け入れていたり、希望する生徒が増加したりしていることからなくしてはならない課程であり、増やすことも検討が必要である。
＜小規模校の配置＞
○　公共交通網の状況等、通学できない事情のある生徒にとっては、地域に小規模でも高校があることは大事である。小規模校のメリットは見方によってはデメリットであるとの意見もあったが、通学できない生徒のことを優先して考えてほしい。 ○　今の大学進学は、総合型選抜等の一般入試以外の受験方法の割合が増えてきており、教員のバックアップにより普通科の進学に重点的に取り組む高校でなくとも、就職は元より大学進学もできる。小規模校であっても学力を身に付けることはできるため、生徒数の減少に伴い統合するという流れを止められないものか。 ○　地域校の存続のためには、教育の質と教員の確保が必要であり、近隣の高校の教員と連携した授業（派遣方式）やオンラインでの授業（オンライン方式）、合同授業等の仕組みをつくり、小規模校の存続を検討すべき。
＜通学手段の確保・通学支援等＞
○　自宅から離れた高校であっても魅力ある高校を選択するものだが、金銭的な負担が大きいのも事実である。魅力があっても通学できない高校も多いことから、通学できる環境づくりを検討する必要がある。 ○　青森県内の郡部の生徒数の減少は顕著であり、地域の高校を維持できるかというとそうではないが、そこに住む生徒の学習機会を確保するため、通学可能な範囲や下宿で対応できるのかといった観点からも検討すべき。

＜再編の方法＞
○　県内に留まる学生を増やすため、専攻科や高等専門学校のように、専門的な教育が受けられる高校を増やし、学費をかけずに高度な教育を提供してはどうか。 ○　水産学科の単独校は全国的にも減少してきており、工業高校との統合やキャンパス制の導入など、他県では工夫しながら取組を実施しているため、これらも参考としながら検討する必要がある。 ○　少子化が進んでいる時代において、各校が魅力化を図り生徒を奪い合うのではなく、これからは、学科の統合や組み合わせが大切である。 ○　普通科と専門学科を組み合わせ、地域として総合学科の機能を待たせる等の大学科の組み合わせについても検討してはどうか。 ○　学科により教育課程が異なるため、異なる学科を有する高校の統合は、学校行事が一緒にできなくなるなどといった課題もある。
＜教員等の配置＞
○　一部の進学校を除けば「入りたい高校」ではなく「入れる高校」を受検しているのが現状である。また、私学助成が手厚くなったことで公私の別なく選択しやすくなり、これまでに比べて通学の利便性や部活動の充実度等で高校が選ばれている。私立高校以上に多様な体験を提供するためには、人材の発掘や登用が必要だと考える。 ○　就学支援金制度もあり、県立高校と私立高校の垣根が低くなっている。県立高校も特色を出すためには、勤務年数に左右されない人員配置も必要である。
＜私立高校との関係＞
○　地域に通学できる高校があることは重要であり、人口減少が進行していく中、県立高校と私立高校との関係についても真剣に考えた方が良い。